今月のミニ展示コーナー 解説シート

【 展示のテーマ 】　ー編組の世界から探る縄文のムラー

北野原遺跡と祇園原貝塚

本市では、市役所周辺の通称「国分寺台」に所在する国分寺台遺跡群について、発掘調査・整理作業を経て、報告書刊行に至る事業に取り組み、祇園原貝塚や西広貝塚などの縄文文化の資料的価値の高さを全国に広めましたが、今後は当時の生活文化をより詳細に復原していこうという取り組みが求められます。そこで今回は、土器の底に残された編組圧痕を取り上げ、整理・報告が行われた北野原遺跡と祇園原貝塚を再評価したいと思います。

＜北野原遺跡と祇園原貝塚＞

北野原遺跡と祇園原貝塚は、国分寺台遺跡群のほぼ中央にある市役所北側に位置します。標高は海抜 23～26m 前後を測り、両遺跡の距離は約 300m 程です。間に浅い谷津が入り込んでおり、北野原遺跡の縄文遺構は北側の台地縁辺にあります。本市では検出例が少ない称名寺式と呼ばれる縄文時代後期初頭から、後期前葉の堀之内Ⅰ式期の集落と考えられます。

一方、祇園原貝塚は、北野原遺跡から谷を挟んだ南側の対岸に位置し、縄文時代中期末から晩期前葉までの縄文遺構が展開しており、後期前葉の堀之内Ⅰ式期から後期後葉の曽谷、安行Ⅰ・Ⅱ式期を経て、晩期前葉までを主体としています。

北野原遺跡・祇園原貝塚位置図

＜北野原遺跡と祇園原貝塚の共通点＞

北野原遺跡と祇園原貝塚の縄文遺構には、いくつかの共通点が見られます。竪穴住居では、両遺跡とも大規模な竪穴住居には出入り口施設が伴っています。出入り口施設内及び周囲には、食糧を貯蔵する冷蔵庫の役割があったのでしょうか、大きな貯蔵穴が作られています。また、多様な土器や装飾品が出土していることも共通しています。北野原遺跡からは、堀之内Ⅰ式期前葉に比定される出入り口施設を伴う柄鏡形住居より注口土器が出土し、他には、

土でできた土製の腕輪が出土しています。一方、祇園原貝塚からは、異形台付土器などの他に、土製の耳飾りやミミズク形土偶が出土しています。

北野原遺跡柄鏡形竪穴住居跡

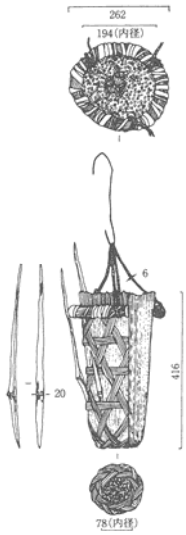
そして、土器の底部に残された、敷物と考えられる編組製品の圧痕は、全国的にも出土数が少ない左上がりの飛びござ目の圧痕が付着していることが両遺跡に共通しており、縄文時代後期初頭から後期前葉に生活していた北野原ムラの人々が、後期前葉に何らかの理由で南方３００mの谷を挟んだ対岸である祇園原の地に移動したと考えられます。

祇園原貝塚では、中央にマツリや集会場として使われていたと考えられる広場があったと推定されていますので、ムラの成員が増え、中央広場等を確保する必要性から、手狭な北野原の地から広い土地を持つ祇園原の地に移動したのかもしれません。

＜北野原遺跡と祇園原貝塚の豊かな生活文化＞

両遺跡の出土品を見ると、豊かな編組製品に囲まれた生活の一端を見ることができます。北野原遺跡からは、カゴと考えられる編組製品を模倣した土器が出土しています。

北野原遺跡カゴ模倣土器



「べんけい」

また、祇園原貝塚からは全国的に極めて出土数が少ない「連続枡網代」と呼ばれる組み方で作られた敷物が転写された土器の底部が出土しています。転写痕跡をよく観察すると、枡形部分が底部の中央に位置しておらず、この土器のために特別に作られた敷物ではなく、破損した敷物等を土器の成形台として再利用したことが考えられます。

これは、高度な技術で組まれた連続枡網代の敷物が特別なものではなく、日常生活に身近なものであったことを示すのではないでしょうか？

祇園原貝塚「連続枡網代」土器圧痕

日常生活の必要を満たすためならば、複雑な組み方は必要ありません。

そこには、縄文時代特有の呪術的側面が含まれているかもしれませんが、この土器に残された連続枡網代の痕跡からは、手間のかかる編組製品作りを楽しむ、高い生活文化を感じます。

べんけい実測図：名久井文明・名久井芳枝 2001『山と生きる』物質文化研究所一芦舎（野澤裕美作図）より